②「女の考えるまちづくり」をビデオで表現

「中区女性フォーラム実行委員会」の報告から

嶋田昌子

一―ビデオ「中区を故郷に」が出来るまで
二―「女の考えるまちづくり」の視点
三―中区女性フォーラムの足取り
四―ビデオ製作その後
五―私達の学習と活動

一――ビデオ「中区を故郷に」が出来るまで

❶―井戸端会議は侃々諤々（かんかんがくがく）

「二階建ての家より高い歩道橋で、スロープもないのがあるでしょ。買物がつまっているショッピングカーを、上まで担ぎあげなくてはならない時のツラサ」

「子どもをおんぶしたり、上の子がまだ上手に歩けない時なんか、子どもを片手に抱きあげ、片手に荷物を担いで、もうスゴイ格好よね」

「雨でも降ったら、その上、傘もささなければならないでしょ。それはもうミジメ。学生時代の友達に一番会いたくない時だわ」

話題がいつしかそれていくのも、気心の知れた仲間の集まりの常。それでも、いつの間にか元のテーマに戻っていきます。

「歩道の真ん中に電柱が立っていたり、自動販売機が邪魔している所って、意外と多いのよね。ベビーカーを車道に降ろさないと絶対通れないの」

「車椅子はもっと大変。あれは段差がつらいの。近くに助けてくれる人がいればいいのだけど」

「女の考えるまちづくり」をテーマにした話し合いの席上での会話です。運営委員会とは言うものの、テーマがテーマだけに議論百出。まさに井戸端会議の様相を呈しています。

❷―本音を言えるテーマ

「女の考えるまちづくり」というのは、中区女性フォーラム実行委員会（会長・加藤愛子、副会長・服部孝子、以下「中区女性フォーラム」と略称）が発足して以来のテーマの一つでした。

これまでに話し合ってきたまちの問題点をもう一度洗いざらい列挙して、自分達の手で再点検してみよう、というのが昭和六十二年度の中区女性フォーラムの方針でした。題して「タウンウォッチングから学ぶ〝女の考えるまちづくり〟」と決定しました。

年度初めの運営委員会でテーマが決定し、スタートした時には、自分達の手で調べるということに心踊るものがありました。今までのように、シンポジウムや講演会などで、講師に代弁してもらうのと違って、自分達の本音をぶつけることができるのです。

❸―中区の特殊性

官庁街、ビジネス街としての中区。ショッピング街としても有名な中区。港を中心とした観光地中区。何と言っても、中区は横浜の顔なのです。

一方、ＭＭ21をはじめ、新本牧の新しいまちづくりも着々と進んでいます。変貌の激しい中区でもあります。

こうした中心地区に住むことは私達の誇りである反面、そこで暮らしていくには、疑問や不満も多いのです。私達が生活者という視点を打

写真ー1　中区女性フォーラムの新聞報道

（11）　新年特集「都　市」　神　　朝日新聞

主役は住民

女性の目

京都・横浜

歩き回って改善案

京都市の平安神宮前の歩道沿いにある男性用公衆トイレの入り口に昨年春、市が目隠し板を立てた。それまでは、用足し中の姿が歩道から丸見えだった。「目のやり場に困る」。女性ばかり百人でつくる「女の目で見るまち研究会」が指摘した。

住宅開発の会社が「女性の意見を生かしたい」と募り、会ができた。が、「どうせなら、市内全部を見よう」と、自由に動き出し、スポンサーは口だしをあきらめた。

一九八六年夏から一年間、女性たちは六つの班に分かれ、大通りから路地へ、商店街から住宅地へと、くまなく歩いた。

「細い歩道にあるガードレールって、フレアスカートが引っ掛かるのよね」

「和服やタイトスカートだと、バスの乗降口が高すぎるわ」

観察記録はカード五千枚、写真二千枚。八七年、「女のまちづくり宣言」という本にした。市職員も熱心に読んだ。「いやあ、ろかつでした」。ほんの少しだが、町が変わりつつある。

横浜市中区の女性十六人は、自分たちの住む町を二本のビデオテープに撮った。題して「生活者の目で見直してみよう」。

「デザイン都市宣言」をしている同市の元町商店街の車道はデザインに凝って、でこぼこした敷石になっている。しかし、歩行者天国になる土、日曜日、ハイヒールの女性たちは足をくじきそうになったり、石の間にヒールを食い込ませたり。

二台のビデオを手に三週間。歩道の段差、手すりのない急な階段……。「男性や専門家には見えないところもあるのよ」。八七年末完成の作品をもとに昨夏、シンポジウムも開いた。

「ベビーカーを押して歩けやしない」。彼女たちの声で、幅一メートル弱の歩道の真ん中に立っていた電柱が、先ごろ移された。

若者に人気の元町商店街。しゃれた石畳も、ハイヒールだと歩きにくい　＝横浜市で

ちだしたのは、中区のこの地域性に大層かかわっています。

私達は、よく「トンネルからこっち」「トンネルの向こう」という言葉を使います。このトンネルとは「麦田のトンネル」、すなわち「山手随道」のことで、山手の丘陵が中区の文化を二分している、と言っても言い過ぎではありません。歴史的にみても、片方は横浜開港とともに人工的につくられた新しいまちであり、片方はそれ以前の歴史を色濃く残している、どちらかといえば古いまちなのです。

そして、「トンネルの向こう」は、開港場への労働力提供と食糧補給地の役割を与えられていました。やがて横浜が経済、工業の面で大発展を遂げても、程度の差こそあれ、常に主に対して従の役割は変わることなく現代まで続いています。

中区の人口の三分の二は、こうした「トンネルの向こう」に住んでいるわけです。「トンネルの向こう」は、中心地から見ると山手の丘のかげに隠れ、視野から完全に消えてしまいます。この視覚からくる地域感覚が、中区のまちづくりに影響を与えているのは、無理のないことかもしれません。

この「トンネルの向こう」の悩みは、周辺の区と悩みを同じくしていると言ってもよいでしょう。

❹―まずはタウンウォッチング

自分の住んでいるまちって、知っているようで知らないところもあるものです。まずはタウンウォッチング。まちを歩いてみました。まちで目についたこと、気になることを持ち寄って、話し合いを重ねました。

委員会の度ごとに問題点は次々と増えていき、遂には二百項目を越えました。春から夏、回を重ねる度にふくれる項目をどうまとめあげるかが、記録係（渡辺）の腕でした。

(a)　人が通るところ

(b) 人が集まるところ
(c) 人が住むところ
(d) 人が生活する時の心

に分類しました。

(a) 人が通るところ、の例を一部紹介してみます。

○側溝の蓋の穴や敷石と敷石の間に、杖やヒールのかかとがはさまりやすい。
○信号が早く変わるので、障害者達が危険である。
○街灯が足りない。
○歩道に駐車している車が多い、などなど。

(b) 人が集まるところ、の例では、

○青少年（とりわけ中高生）が気軽に立ち寄れる遊び場がない。
○公園が観光地化し地元民には使いにくい。
○広域避難場所が遠すぎる。
○区内コミュニティ施設の地域分布がアンバランスである、などなど。

(c) 人が住むところ、の例では、

○集合住宅の布団干しは危ない。
○家の中だけでなく、外にも花を飾ろう。
○低い塀や植え込みが望ましい、などなど。

(d) 人が生活する時の心、では、

○地域にのこる当番制は義務感が先に立つ。
もっとボランティアの自発性を生かしたい。
○定年退職者の男性が地域で活躍していく方法を知りたい。
○公共心の啓発、などなど。

(a)(b)の項目の多さにまず驚かされたものでした。どちらかと言えば、(c)(d)は自分の身近な問題であるのに対して、(a)(b)はある距離を置いた問題なのです。個人で解決しやすい場所が(c)(d)であるとするならば、(a)(b)はその多くが公共の場所で個人では手が出しにくいため、問題点が多出した、とも考えられます。

❺―黒白決めかねる問題ばかり

しかも、その一つ一つに別の側面があることに気付かされました。

例えば道路を歩きにくくしている植木鉢や商店の出っ張りにしても、人によっては心がなごむとか、活気があって良い、とも感じるのです。

街路樹一つ取りあげても、まちにいつも緑をと常緑樹を選ぶ人、落葉樹の四季折々の変化を楽しみたい人、街路樹の根本に植えられた小灌木でストッキングをだめにした人、ベビーカーに乗せた子どもが、植え込みで傷付いたりするので不必要という人、それはまあ様々です。

学校施設を地域にもっと開放して欲しい、と願う人がいる一方、夕方や休日まで騒音があるのはかなわないとか、事故を心配する人もいます。

まちの問題点をチェックすると、相反する事柄が浮かび出てきて、簡単に黒白を決めることは出来ないのです。右を主張する人、左を主張する人、どちらにも言い分があり、それをジャッジする立場に私達はいません。生きた人間が生活する場だからこそ、こうした矛盾も生まれるのでしょう。

❻―どう表現するか

この混沌とした事実をどう表現するか、暗中模索の時が過ぎました。

そして出た結果が「映像で表現する」ことでした。ビデオを作ろう、私達はそう結論を出しました。子どもからお年寄りまで誰にとっても、映像は身近なものになりつつあります。しかも無言の主張の中に「こんなことでいいのかしら」と、見る側に考えてもらえる手段として最適と思われました。時間と空間の飛躍ができることも、矛盾を矛盾のまま観客に投げかけたい私達には、ピッタリの方法でした。

とはいえ、初めての試みであり、ビデオカメラを扱ったことのある人間は誰もいない、という状況での大勇断でした。当時の様子を第三回報告書には、次のように記録しています。

「新しい体験は楽しみと恐怖。ビデオ撮影隊

に参加した私は、初めてビデオカメラに触れたのです」(田尻)。「以前市社協のビデオ撮りの講習会に、年甲斐もなく参加しました。機械いじりはとても大変な作業です。フォーラムの委員達は、初めてというのに、この機械を使って、すばらしいビデオテープを作りました」(大沢)。

❼―二本に分かれたシナリオ

ビデオテープが出来上がるまでを、段階を追って書いておきます。

まずは問題点の整理検討、シナリオづくり(山本・板倉)。ここで時間をかけたことが成功の鍵だったようです。そしてシナリオ製作に際しては、フリーライターの相川優子氏を御紹介いただき(市教育委員会の前社会教育指導主事の篠田登美江先生に感謝)、その指導を仰げたことは、望外の幸せでした。相川氏の話し合いへの参加により、私達はシナリオの何たるかを、少しずつ知ることができたものと思います。

シナリオ担当者は、先の報告書にこう書いています。「何も分からない素人がビデオを作ると言う。そんなの、無理、無理。おまけに私にシナリオを書けと言う。七転八倒の三昼夜。結局、一主婦のつぶやきを素直にぶつけるしかないと開き直る」(板倉)。

あの膨大な項目を何とか流れる作品に仕上げるために、途中でシナリオを二つに分けました。第一編が女の目の高さでわがまちを見た「中区を故郷に」で、第二編が子どもの成長と公園にかかわる問題点だけを一本にまとめた「子どもの遊び場」です。

「子どもの遊び場」を描くには、説得力のある客観的データーを用意する必要がありました。十一月初旬に、中区家庭教育学級の交流会が開かれ、委員(飯尾・高木)の協力により、アンケートを集めることができたのは、嬉しいことでした。また海外の公園事情(イギリス、アメリカ、ブラジル、スペイン)の部分には、中区女性フォーラム運営委員の経験談を生かすことができました。さらに子どもの遊び場を考える「横浜いいじゃん会(代表黒柳)」の存在も、心強いものでした。

❽―素人が作りあげたビデオ

それから先は絵柄の決定、ロケハンティング、と一気に突っ走ったのです。撮影(石川・大溝・加藤・国井・黒柳・嶋田・高木・田尻・服部・渡辺)に入ったのはもう十一月。一日一日短くなる夕陽に背中を押されて、まる三週間区内を駆けめぐりました。

どこへ撮影に行っても、地元の協力を得られました。出演してくださった方々。取材の内容を深めてくださった方々。地域に密着した活動をしてきた運営委員の、日頃の努力がものを言った毎日でした。

吹き込み(布川・天野)と編集(国井・嶋田)にかけた最後の一週間は、徹夜をしたことも何度かありました。

あの慌ただしかった秋の日々を思い出すにつけ、女達のつながりの大切さをひしひしと感じます。カメラマンの一人はこう書いています。「ビデオが出来上がり放映された時は、涙がとめどなく流れました。みなさん、有難う」(石川)。

写真―2　ビデオ「子どもの遊び場」

こうしたビデオ「中区を故郷に」「子どもの遊び場」の二本がすべて素人の市民の手で、しかも女性の手で仕上げられたことは、私達の喜びであり、女性だからこそ出来たことと自負しております。

❾—中区役所と共催シンポ

この間、中区役所市民課から、「国際居住年」にあたり、シンポジウムを開催するので協力して欲しい、という話が持ちあがりました。何度かの話し合いの結果、中区女性フォーラムのそれまでの積み重ねを生かすこと、製作中のビデ

写真—3　もうひとつの中区発見シンポジウムの様子

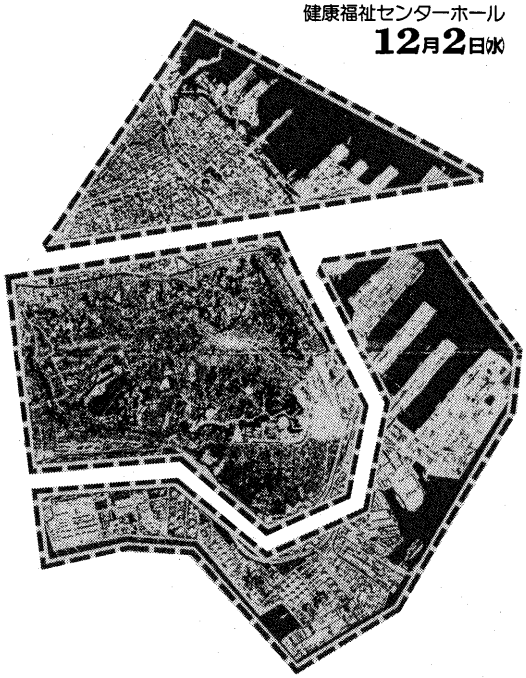
図—1　もうひとつの中区発見シンポジウム

もうひとつの中区発見シンポジウム

生活者の目で見直してみよう

健康福祉センターホール

12月2日(水)



もうひとつの中区発見シンポジウム実行委員会

横浜市中区役所・中区社会福祉協議会

日本国連協会横浜市支部中区分会

中区女性フォーラム実行委員会

プログラム

1. オープニングスピーチ
   加藤愛子（実行委員長）
   関　良制（横浜市中区長）
   （総合司会：服部孝子）
2. ビデオ上映
   『中区を故郷(ふるさと)に』
   （解説：嶋田昌子）
3. シンポジウム
   矢沢澄子　山崎洋子
   森まゆみ　緒方昭義
4. 意見交換
5. 閉会のあいさつ

オ上映をすること、ビデオ製作への資金協力、シンポジウムへは企画段階から参加することなどで合意が得られ、第一回シンポジウム実行委員会が十月初めに開かれました。

「もうひとつの中区発見シンポジウム〝生活者の目で見直してみよう〟」です。数回にわたる実行委員会の詳細は省きますが、中区役所の全面的協力が得られたことは、私達にとって大変嬉しいことでした。

二――「女の考えるまちづくり」の視点

❶―男性のつくる「まち」

これまでまちづくりと言うと、どうしても行政や企業によってことが運ばれてきました。しかも伝統的な都市計画観では、まちづくりは男の仕事、と暗黙のうちに決められていたようです。

勿論、七十年代前半のオイルショックは、市民意識にも大きな変化を生じさせ、市民自らがまちづくりの主人公であるべきだ、という考えもひろまってきています。高度成長期の経済優先社会の中で、能率と物的欲望をのみ追求してきたことへの反省として、人々の目が公害や婦人問題、老人問題などに向けられ始め、まちづくりへの参加志向もその中にありました。

ところが、そこに顔を出す市民は何故か男性に限られていました。そして現代のまちは、相変わらず経済重視一点張りだし、デザインは洗練されてきているものの、機能優先、合理性第一に走りすぎているように思えます。

❷―生活の主宰者は女です

言いかえれば、「今のまち」は日常の生活と結び付いていないのです。

生活は流行ではありません。日々の営みの積み重ねです。人が生まれ、成長し、結婚、子育て、死という繰り返しの場です。生活とは、ハンドメイドの世界だし、非合理性のかたまりなのです。

その「今の生活」の主宰者は女です。寝たきり老人を抱え、ボケ老人を介護し、年寄りのグチを聞いてあげる女達。障害者をいたわり、身体や心の痛みを我が身のものとして受とめてきた女達。どういうものか、家庭にしろ、ボランティア活動にしろ、こうした助けを必要としている人々の隣には、必ずと言ってよいほど、女の優しくしっかりした手がありました。

それは現代社会の歪みにひめいを上げている子どもたちに対しても同じでした。女は弱者の代弁者の役割を担っています。

現代の生活者にとって、女にとって、生活の場で何が必要か、ということは、即まちづくりへの素朴な要求へと結び付きます。

私達は、生活の場として「まち」を見直してみようと思ったのです。改めて女の目で見直したまちは何と住みにくいことか。現代のまちには、とりわけ弱者への配慮が欠落しています。お年寄り、子ども、障害者にとって住みやすいとは言えません。

❸―地域社会の守り手としての女

現代社会は女に母として、妻としての役割だけでなく、社会人としての役割も求めているのです。これは単に職業への進出だけを意味しているのではありません。

時代の趨勢は男にも大きな変化をもたらしました。かつては多様であった男の役割が逆に狭められ、否応なく職業人のワクにとじこめられています。

こうしてトータルな生活の場である地域社会においては、かつてのようにウチは女の仕事、ソトは男の仕事というわけにはいかなくなりました。男の役割、女の役割という男女の性による役割の分業は、まったく時代遅れのものになったのです。

男のいなくなった地域社会の守り手としての女の役割は、ますます重くなってきました。P

TA、町内会の役員。その他、民生委員、保護司、体育指導委員、青少年指導員にしても、何と女が増えたことか。地域の祭りやイベントへの協力も、今は女抜きには考えられない時代です。

悠久の昔から、人々は日常生活の営みを通して他の人々と肩をよせ合い結び付き、それがコミュニティーの原点でした。地域社会で一番大切なものは、人と人のつながりです。それをいかに円滑にするか。まちづくりのソフト面の運営は女の得意とするところです。「コミュニティー・コーディネーター」だと言っても良いでしょう。

❹―女の考えるまちづくり

今、女達の役割はますます重要になってきています。

地域社会のウチでも、ソトでも、女達は自分の負わされた荷への責任感から、主張を始めました。ウチの問題はソトと密接に関係し、ソトの問題もまたウチに深い根を持っていることに気付きます。

「男のつくるまち」は、どこか住みにくい。このまちづくりの問題点を、私達は女の視点を取り入れることによって、解決しようとするものです。私達は、まちをマイナーな視野で捉えます。どちらかといえば、ハードよりソフトの機能の充実を望むものです。

ハードな構造体としてのまちを考える時も、一方に中央集権的「シンボル」を求める思想があるならば、女達は水平の美しさを愛します。立派な塔よりも、生活の匂いのしみこんだ心安らぐ路地裏が大好きです。

これからのまちは、見た目の美しさだけでなく、優しさが感じられるまちになって欲しいのです。優しく人を包みこむ、ぬくもりのあるまちこそ、私達の希望するまちなのです。

三――中区女性フォーラムの足取り

これまでも中区女性フォーラムは具体的な提案をしてきました。先に述べたビデオ作りの際に上がってきた数々の項目にしても、特に新しいというものはなく、私達が活動の中で何度もくり返して言ってきたことなのです。

交通の問題、ゴミの収集、緑の保全、子どもの遊び場の確保、失った海岸線、石油工場からの悪臭、車の騒音、老人施設の不足、違法建築などなど。どれもこれも生活の場からの切実な訴えであり、生活者である女の目を通しての物言いなのですが、なかなかまちづくりの中に取り上げられません。

私達がビデオを取り入れたのも、今、新しいという話題性を利用して広く世に訴えるといったところがないでもありません。

これまでの私達の活動を次に述べます。

❶―昭和五十九年度に発足

中区女性フォーラムが組織されたのは、国連婦人の十年最終年の前年、昭和五十九年のことです。

何かまとまって活動をしたい、という中区の女性グループの代表が集まりました。婦人団体、消費者団体、生涯学習グループ、PTA、編集者など、地域の様々な活動を通して生まれた組織の代表者達でした。年齢にしても、明治生まれから、昭和二十年代生まれまでの幅広い年齢の女達です。それまであまり交流のなかった異なったジャンルのグループが協力し合い、中区女性フォーラムを結成しました。八人だった委員も、現在は倍の十六人を数えます。

最初は情報交換の場であり、連絡会的傾向を持っていました。やがて各グループが抱えていた問題にしても、人間関係が「地縁＋友縁」と重なり合っていくうちに、個々の問題を相互のものとして捉えなおすようになりました。

❷―第一回「中区女性フォーラム」開かれる

（昭和六十年度）

昭和六十年度には、第一回「中区女性フォーラム」が「女性の可能性を求めて」のテーマのもと、中区役所の力強い後援を得て、講演会、集い、女流展、演劇鑑賞会など、多彩な催しを繰り広げ、スタートしました。すでにその時から「女の考えるまちづくり」分科会が設けられました。かつての井戸端会議はどこへ、多様化するまちの機能を女性の視点から見直してみましょう、と参加者に問題を投げかけました。

年度最後の反省会では、参加者の共感を得た「まちづくり」を共通の基盤として、それぞれの問題を問いなおしてみよう、という次年度へ向けての方向性が打ち出されました。

❸―「オリブ工房」建設を推進（昭和六十一年度）

六十一年度の第二回「中区女性フォーラム」では、年間テーマを「女の考えるまちづくり」と決め、連続四回のミニ講演会を経て、分散会、パネルディスカッションを持ちました。国際居住年を先取りしたテーマとして、反響を呼びました。

この年、テーマが「まちづくり」一本に絞られたのは、

(a) 活動目的が異なるグループが協力しやすいテーマであること

(b) 前年度のテーマが好評だったこと

(c) 国際居住年を控え時機に合ったテーマであること

の他に、もう一つ地域に問題が生じていたことによります。

それは新本牧に建設が予定されていた、十八歳以上の精神薄弱者の通所更生施設である「オリブ工房」に対して、地権者の中に反対運動が起きたためでもありました。公共図書館、地区センターと併設される理想的な取り合わせと思われるのに、何故か「オリブ工房」にのみ反対の声が集中しました。

中区女性フォーラムの委員の間に、反対運動への疑問がわき、早速、勉強会を開きました。福祉、女性、消費者、民間の観点からまちづくりを考える四つのミニ講演会はその結果です。

その後のパネルディスカッションでも、期せずして同施設問題が会場より提案されました。「障害は誰の身の上にも起こりうる。ハンディを持つ者が安心して生きていけるまちの方が、立派なまちではないか」「人間性あふれるまちづくりを進めるためにも、施設は快く受け入れるべきだ」「こうした地元の声を集めて、施設建設への理解を求めていこう」「施設を孤立させるのは、中区の女の恥」など多くの意見がでました。討議は建設推進の方向が圧倒的でした。

その後同施設は建設が着工され、今春にはオープンする予定です。地元の同施設への理解に、ほんの僅かでも、中区女性フォーラムの力があずかっているとしたら、とても嬉しいことです。

四――ビデオ製作その後

❶―テレビシンポジウムに夢をふくらませる

最近の活動としては昭和六十三年秋、戸塚にオープンした「横浜女性フォーラム」の開館記念イベントに参加しました。

市民参加イベント「ヨコハマ井戸端会議」部会の一部として、テレビシンポジウム「女の考えるまちづくり」を企画しました。

ビデオ「中区を故郷に」の放映を含め、パネラーの先生方の提案が会場の参加者の意見を引き出し、フロアーから次々手が上げられました。

会場正面に拡大して放映された画像も鮮明で、テレビカメラの一台は熱気に満ちた場内風景を、もう一台は一階ロビーで場外テレビ視聴者の意見を拾うなど、リアルタイム参加の名を恥ずかしめないものでした。この館内全体を巻き込む手法は、私達が中区でシンポジウムを開

いた時から、区の担当者と一緒に夢をふくらませていたもので、初めは全国にまでそのネットを伸ばすつもりでいました。

テーマの「女の考えるまちづくり」はまったく変わりないものの、大同団結して社会・政治・行政にもの申す的発想に、市民権利、義務の視点が付け加わったのは、五年の積み重ね故でしょう。（今年もささやかながら通行の邪魔になる電柱の移動、という実際の成果がありました。）

図ー2　横浜女性フォーラム開館記念イベントのチラシ

横浜女性フォーラム開館記念イベント

テレビシンポジウム

女の考えるまちづくり

急激な変貌を遂げようとしている大都市「横浜」。街はきれいに整備されつつあります。でも、そこに生活する私たちにとって、本当に住みやすい「まち」になっているのでしょうか。チョットご一緒に考えてみましょう。

日時：９月１３日（火）
10：00〜12：30

場所：横浜女性フォーラム
セミナールーム

パネラー
井上純子（京都㈱C・D・I）
猪爪範子（地域総合研究所）
キャサリン・長島（都市計画家）
森まゆみ（「谷根千」編集長）
矢沢澄子（横浜市立大学助教授）

ビデオ上映
『中区を故郷に』
解説／加藤愛子（中区女性フォーラム実行委員会）

主催／中区女性フォーラム実行委員会
☎651−1212（中区役所市民課）
横浜女性フォーラム井戸端会議部会
☎862−5056（イベント事務局）

❷—市民のネットワークづくり

なお同部会は、市内各地から集まった十人の女達によって構成され、さらにはボランティアとしての参加も加えると、五十人近い大所帯でした。私達はこの部会で、中区の仲間づくり、すなわち地域のグループや個人を横つなぎしてできた中区女性フォーラムの輪を、全市的に再展開しようと考えました。

これまでの組織がしばしばタテ構成であったのに対し、私達は横につながる組織の面白さを知りました。このことは現代の女の発見ではありません。女達が原始の昔から踏襲してきた、情報交換の方法に過ぎません。女達はそうした横つながりの中から情報を得、互いに高めあい、生活の知恵としてきました。

現代のネットワークも、横に横にとつなげていくことにより、より力のあるものになると信じています。

地域のネットワークづくりは、中区女性フォーラムのように長期的な組織や、戸塚のヨコハマ井戸端会議のように一時的なもの、範囲の広いものや狭いもの、これからもいろいろな組織が生まれるでしょう。いくつもの連帯が重なりあっていく時、まちへの女達の思いは、実現へ一歩ずつ近付いていくのだと思います。

❸—今、私達は、…。

昭和六十三年度後半は、前半が戸塚でのイベント参加で動の時期であったことに対し、静の季節です。学習会を重ね、「横浜の女を語る」と題して、ビデオ・スライドを用いた連続講演

会を催しました。横とつながり前へ進む動きをしてきた私達にとって、後ろを振りかえること、先を歩んだ女達の足どりを知ったことは、貴重な学習でした。私達は如何に先輩の恩恵をこうむっているかを心にとめ、明日の活動への責任に思いを新たにしました。

来年度のテーマは、「おんなの考えるまちづくり」をすすめていく中で、高齢化社会を取り上げる予定です。迫り来る高齢化社会を、さて、どんな切り口で迫ろうか、楽しみに企画中です。

五――私達の学習と活動

振りかえってみると、中区女性フォーラムが、活動目的の異なる団体同士の横つながり組織でなかったなら、いまだに学習のテーマは限られ、情報も小グループ内に死蔵されたままで終わったかもしれません。視野の広がりが、その後の活動の広がりを生みました。

また活発な活動が継続したのは、組織づくりにしても、地域性を重視して、まず足下の地元から固めていくよう努めたことにもよると思います。そして先にワクを決めるのではなく、その時に応じて次々と横につながってきました。

しかし異質グループがともに活動するためには、共通項目を引き出さなくては、一致した活動はできません。そして据えられたのが、「おんなの考えるまちづくり」であったわけです。生活を基盤とした学習課題と言えましょう。

身のまわりから出発しない組織やテーマは、どうも机上の空論になりがちです。この地域性と生活の裏付けを持つことが、市民の学習にしても、活動にしても、大変重要であると思います。

中区女性フォーラムはこのように学習組織でもあり、活動組織でもあります。私達にとって、学習と活動は不可分です。学習から出発した活動、逆に活動から出発した学習の相互運動をくり返しています。

〈中区女性フォーラム〉